現代ロシア社会の職業評価基準

—— モスクワとウラジオストクの若年層に対する調査から ——

松 本 かおり

(大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程)

Occupational Evaluations in the Present Russian Society: Findings from Research on Students in Vladivostok and Moscow

MATSUMOTO, Kaori

Osaka University, postgraduate student

Abstract

This paper aims to compare students in Vladivostok and Moscow, Russia and examine the differences between desirability of occupation and occupational prestige by analyzing answers to questionnaires.

At present, it is very difficult for Russian youths to find employment. After the demise of the Soviet Union, it became difficult for them to acquire even basic skills and gain experience through on-the-job training, the traditional way of acquiring know-how for Soviet workers. Even if they do find jobs, these are often unrelated to their majors and/or specialties in the higher education institutions. It should also be noted that premature death rate of youths has escalated in recent years. Therefore, it is wrong to assume that the social life condition of Russian youths is significantly better than others. It is in this context that this research on occupational evaluations is conducted.

The result of our comparative research demonstrates some differences in occupational evaluations between Vladivostok and Moscow. In terms of desirability of occupation, Vladivostok youths consider job attractiveness, income, school education, knowledge and skills, while Moscow youths are interested in job attractiveness, creativity, and pride. Meanwhile, occupational prestige is characterized in terms of higher income, stable social life, school education, knowledge, skills and social network in Vladivostok, and higher income, stable social life, and influence on society in Moscow. It concludes by suggesting that Vladivostok is a kind of “education-conscious society” where students value diligence, while Moscow is a kind of “authority-oriented society”, where knack and intelligence are more important than Vladivostok.

The research also reveals that students in both cities value job attractiveness most, not easy jobs and long leisure time. As mentioned above, however, there is little chance in reality to find jobs that satisfy them. It is obvious that there is a

Keywords: occupational evaluations, desirability of occupation, occupational prestige, education-conscious society, authority-oriented society

structural gap in the Russian labor market resulting from inefficient vocational education in the higher education institutions and the so-called “educational inflation”, a situation where even higher degrees will not guarantee these jobs. Taking all things into consideration, we have to analyze the Russian labor market further with respect to various changes taking place in this country.

は じ め に

ロシアの労働問題を捉える場合には、客観的現象を示すものとして経済統計の分析が行われ、移行に伴う経済状況の悪化が問題の中心とされる傾向にあった。しかし、現実の労働市場における問題は、すべて経済状況に集約されているわけではなく、そこに生きる労働市場の主体である人間の意識、すなわち労働観や職業に対する意識などから大きな影響を受けている。職業は「社会的地位に関する顕在的な変数もしくは観察されうる社会的指標」⁽¹⁾であり、「社会における階級や階層の最も重要な決定要因」⁽²⁾と考えられており、社会構造に対する人々の意識を映す鏡のような存在といえよう。

そこで、本稿では、現在の若年層の労働市場と職業意識の状況に関するロシア内外の研究状況を検討したうえで、筆者がウラジオストクとモスクワの大学生に対して行った職業の評価に関する調査の結果を分析する。調査結果は、ウラジオストクとモスクワという地域間の比較、そして職業に対する2つの異なる意識である職業の魅力の評価基準（就きたい職業を選択するときの意識あるいは基準）と職業威信の評価基準（社会における職業のprestigeを定めるとき意識あるいは基準）の比較という2つの視点を用いて、分析を行った。

1 ロシア体制転換における若年層

(1) 労働市場の社会的弱者としての若年層

体制転換期にあるロシア社会では、中高年の失業や社会的ストレスによる Mortality Crisis などの社会問題が指摘される一方で⁽³⁾、若年層に関してはどちらかといえば楽観視される傾向にあるが、実際には様々な問題を抱えている。若年層の労働問題は、その国の将来を決定する重要な問題であるにもかかわらず、中高年の問題に比べて楽観視されがちである。その根拠として、社会変化に対する適応力の高さ、健康上の不安の少なさ、親からの金銭的援助を期待できる点などが挙げられている⁽⁴⁾。市場経済への移行期の勝者は、変化への適応力を持つという意味で、主に若い高学歴の男性であるという指摘もある⁽⁵⁾。これらすべてが事実であるとしても、次のような問題点を指摘することができる。

(1) 直井優「職業的地位尺度の構成」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会、1979、434-472ページ。

(2) ベル、ダニエル著、内田忠夫他訳『脱工業社会の到来（上）（下）』ダイヤモンド社、1975。（Bell, Daniel, *The coming of post-industrial society*, Basic books, 1973.）

(3) Cornia, G., “Short-term, long-term, and hysteresis mortality models: A review”, ed. by G. Cornia and R. Panizza, *The mortality crisis in transitional economies*, Oxford University Press, 2000, pp. 59-80.

(4) Полякова, Н., Незанятая молодежь: Социально-экономический портрет и поведение// *Человек и труд*, № 4, 1999, стр. 42-43.

(5) Brainerd, E., “Winners and losers in Russia's economic transition”, *The American Economic Review*, ↗

図1 年代別失業率

出所：Госкомстат России, *Труд и занятость в России*, М., 1999, 2001 より作成。

国家統計委員会のデータによると、若年層の失業率は、他の年代の失業率に比べて高く（図1参照）、企業が現在雇用している従業員を解雇せずに抱え込んでいる一方で、若年層を雇用しない状況が発生していると考えられる。また、若年層は労働市場への参入経験に乏しく、仕事を見つけたとしても、主に期間限定労働・季節労働などに就いている（図2参照）。このような状況では、若年層は職業能力を向上できず、前の世代の技術力の継承さえ望めない。原因が同一とは言いがたいが、表面上は日本のフリーター現象に近い状態が生じている。その他、人口学的にも若年層が社会的弱者であるという事実が指摘されている。1998年以降の若年層男性の早死率（Premature death）の上昇⁽⁶⁾は、今日のロシアの社会状況に若年層が適応できず、究極的に社会から退出せざるを得ないことを意味している。早死率上昇の直接的原因として、若年層を中心とするHIV・エイズの増加も関連している可能性があり⁽⁷⁾、モラルや行動様式の急激な変化がうかがえる。

就職に有利であると考えられている大学生においても、決して状況は芳しくない。チタ州の国立チタ工業大学での調査研究⁽⁸⁾では、5年生（最終学年）で就職が決まっている学生は53%にすぎず、しかもそのうちの約30%が専攻外の仕事に就く予定という。なかには、同大学での専攻以外に、マネージメント、マーケティング、会計、法学、国家・地方財政などを勉

↑ Vol. 88, No. 5, 1998, pp. 1094-1116.

⁽⁶⁾ 久保庭真彰・田畑伸一郎「ロシアにおける1990年代の人口・年金危機——移行経済の世代間利害調整に関する予備的考察」『経済研究』Vol. 53, No. 3, 2002, 247-267ページ。

⁽⁷⁾ 1995年から2000年の間に、ロシアで報告されているHIVキャリアの数は、251倍も増加した（*Зеленый мир*, No. 15-16, 2003.）。

⁽⁸⁾ Лоншакова Н.А., Региональный вуз и рынок труда: проблемы адаптации (На примере Читинской области) // *Социологические Исследования*, No. 2, 2003, стр. 68-72.

図2 失業の理由（2000年）

出所：Госкомстат России, *Труд и занятость в России*, М., 2001 より作成。

強している学生も存在し、大学での専門分野と社会で必要とされる知識のミスマッチが生じている。求人があったとしても職に就くことができない学生も多く、現在のままでは就業に対して関心を持ってない学生の増加が懸念される。

(2) ロシア社会の若年層の労働・職業研究

現在のロシアでは、若者は、主に同情、苛立ち、恐れ、怒りといった感情を引き起こす存在であり、尊敬や好意を抱かれることは少ない⁽⁹⁾。彼らは、新しい市場経済に統合されることなく社会的に排除される立場にあり、反社会的行動が指摘されている。失業中の若者たちの中には、暴力的な極右集団に入ったり、薬物中毒などの行為に陥る者もいる。たとえ職を得た者であっても、そのうちの約4割が現在の仕事に不満を持ち、近い将来に仕事を変えたいと考え、自分の仕事に対して魅力を感じていない。教育による成果や誠実な仕事をもとに収入を得ることができないことから、仕事に対する尊敬の念が失われ、これまで重要視されてきた価値（技術、良心、責任、誠実、教育、資格など）が軽視されるようになり、犯罪に陥る若者が増加してきたという⁽¹⁰⁾。若者たちが仕事よりもプライベートな生活を重視しており、職業に対する考え方は幼稚で楽天的であるという批判もある⁽¹¹⁾。

次に本稿の研究対象である大学生の労働市場に関して概観してみよう。大学生の就職に関する問題点は、大学によって提供される専門分野と労働市場が必要とする専門的技術の不一致、

⁽⁹⁾ 前掲 *Зеленый мир*, № 15-16, 2003.

⁽¹⁰⁾ Chuprov V. and J. Zubok, "Integration versus exclusion: youth and the labour market in Russia", *International Social Science Journal*, Vol. 52, Issue 164, 2000, pp. 171-182.

⁽¹¹⁾ Юпитов А.В., А.А.Зотов, Исследование ситуации профессионального самоопределения студентов// *Социологические Исследования*, № 3, 1997, стр. 84-92.

雇用者が要求する技能水準と大学生の現実の技能水準との格差、実務経験の欠如、大卒者の専門職の低賃金と賃金の遅滞、大学生に対する就職斡旋制度の不備、仕事に対する不適応に対する対策及び若者に対する社会保障の欠如、教員スタッフの技能の不十分さなど、枚挙にいとまがない⁽¹²⁾。

大学生のアルバイト状況の調査によると、将来の就職に役立つ人間関係づくりのために働いている学生は29.7%いるが、大学での専攻と一致しない職種（ほとんどの場合、肉体労働や商業・サービス部門）で働く学生が半数以上という矛盾が生じている⁽¹³⁾。つまり、就きたい仕事と必要とされている仕事の間に、大きなギャップがある。このように、大学生の就職も、低学歴者の状況と比べれば若干恵まれてはいるとはいえ、好ましい状況にはない。

それでは、筆者が今回行った調査と関連して、ロシアの若年層の職業の序列づけに関する研究を概観してみよう。職業の序列づけに関するプロパガンダが存在する中で、ロシアの社会学者としてはV.シュブキンが職業の序列に関する分野の研究を切り開いた⁽¹⁴⁾。その調査を引き継いで、中等学校最終学年生に対して時系列の調査を行っているのが、Д.コンスタンチノフスキーである⁽¹⁵⁾。ただし、彼らは、職業の序列付けの評定基準を生徒に委ね、職業の魅力と職業威信の概念の相違を知りつつも、これらの概念を曖昧にしたまま、結局分類せずに「魅力（Привлекательность）」という用語だけを使用して調査を行っている。1963年からの時系列の調査であり、今になって大幅に質問項目を変えることはできないというジレンマを抱えている可能性もあるが、今日の労働問題が決して経済状況によってのみ左右されるのではないだけに、人々の好みの職業と、社会での地位が高いと思われる職業とのギャップを見逃すことはできないだろう。

その他、フィンランドとロシアの研究者によって1995年末に実施された職業威信調査がある。調査対象者は、フィンランド南東部の都市ヨアンスと、ロシア連邦カレリア共和国の首都ペトロザボーツクに住む14歳から16歳の青年であった。ヨアンスとペトロザボーツクは、現在フィンランドとロシアに分かれているが、歴史的にはカレリア地方という同じ文化圏にあった地方である。この調査によれば、ヨアンスの青年は、アカデミックな職業を高威信と見なし、また自らは高威信の職業に就く可能性が低いと考えていることが分かった。一方、ペトロザボーツクの場合、ビジネスに関連する職業の威信が高く、大多数の青年が高威信のビジネスに関わる職業を目指している。しかし、調査対象職業は32と不十分で、職業威信に対する価値観の調査や、職業の魅力に関する調査がなされていないという問題点がある⁽¹⁶⁾。

以上のように、ロシアの若年層に関わる労働問題や職業の格づけに関する研究が行われてきたが、職業の評定基準によるアプローチは行われてこなかった。

⁽¹²⁾ 前掲 Лоншакова Н.А., 2003.

⁽¹³⁾ Константиновский Д.Л., Г.А.Чередниченко, Е.Д.Вознесенская, *Российский студент сегодня: учеба плюс работа*, 2002.

⁽¹⁴⁾ Shubkin, V.N., "Social mobility and choice of occupation", edited by G.V.Osipov, *Industry and labour in the U.S.S.R.*, Tavistock Publications, 1966, pp. 86–98.

⁽¹⁵⁾ Константиновский Д.Л., *Динамика неравенства — Российская молодежь в меняющемся обществе: ориентации и пути в сфере образования (от 1960-х годов к 2000-му)*, 1999.

⁽¹⁶⁾ Sinisalo, P. and A.R.Nummenmaa, "Developing occupational goals and plans", ed. V.Puuronen, P.Sinisalo, I.Miljukova and L.Shvets, *Youth in a changing Karelia — A comparative study of everyday life, future orientations and political culture of youth in North-West Russia and Eastern Finland*, Ashgate, 2000, pp. 146–161.

2 本研究における「職業の魅力」ならびに「職業威信」について

(1) 職業評定基準における課題と問題点

本稿では、職業に対する評定基準の中でも、「職業の魅力」および「職業威信」に対する評定基準を検討する。これらの概念は、先行研究においてあいまいにされてきた職業評定の方向性を回答者に対して明確に示し、両者を比較検討するためにも重要である。以下に本稿におけるそれらの定義を行いたい。

まずは職業評定基準に対する議論を検討する。1995年度のSSM調査（日本）⁽¹⁷⁾では、職業を評価する際の評定基準として、「教育（学歴）の高さ」「技能の高さ」「責任の大きさ」「収入の高さ」「世間から受ける尊敬の大きさ」「社会に対する貢献の大きさ」「社会に対する影響力の大きさ」「創造力を発揮できること」「自立性の高さ（仕事のやり方を自分で決められること）」「かっこよさ」「権力の大きさ」の11種類が調査された。これらの項目は因子分析にかけられ、その結果5つの因子が抽出された。第1因子は「社会への影響あるいは社会との結びつき」、第2因子は「職業遂行上の魅力」、第3因子は「技能水準」、第4因子は「報酬」、第5因子は「職業の気楽さ」に関係した尺度であると考えられている⁽¹⁸⁾。ところが、上記以外の評定基準もありうるし⁽¹⁹⁾、日本人とロシア人の評定基準のカテゴリーが全く同様であると確信はできない。さらにSSM調査では、回答者が職業の「何について」評価するのかが、回答者の自由な判断に任されているため、結局職業の何について測定したのかがはっきりしなかった。上記で挙げたロシアの職業の格づけ研究も同様の問題を抱えている。人々は職業を様々な観点で評価しており、例えば、個人的な職業選択の基準と、職業の社会的評価の基準は同じではないだろう。筆者はこの問題を解決するために、「職業の魅力」と「職業威信」を明確に分けて調査した。「なりたい職業」と「職業の社会的地位（prestige）」という、できる限り理解しやすい言葉を使用して、さらに両方の調査を同時に行うことによって、回答者に質問の意図が異なることを認識させた。

(2) 「職業の魅力」の評定基準

本稿における「職業の魅力」とは、ある職業に就いてみたいとか、その職業の人と親しくなりたいといった観点からの評価のことである⁽²⁰⁾。個人的な次元で語られる理想の職業の評定基準であり、社会的な次元での職業の評価とは異なる。職業選択にあたって、すべての人々が社会的に評価される職業を目指しはしない。近年の日本の若年層によるフリーター選択行動の背景にある職業意識を例に挙げるとすれば、フリーターの社会的地位が低いことは若年層の間で十分に自覚されながらも、自由、経験、出会いなどの彼らにとって社会的地位以上に価値が

⁽¹⁷⁾ 日本の社会学者によって10年ごとに行われている「社会階層と社会移動（Social Stratification and Social Mobility）全国調査」のことである。

⁽¹⁸⁾ 都築一治「人は何になりたいのか——職業魅力の構造」海野道郎編『日本の階層システム2 公平感と政治意識』東京大学出版会、2000、37-60ページの分析結果を参照。

⁽¹⁹⁾ 元治恵子「職業評定における評定基準の重視度の影響」都築一治編『職業評価の構造と職業威信スコア』1995年SSM調査研究会、1998、107-123ページ。

⁽²⁰⁾ 岡本英雄、原純輔「職業の魅力評価の分析」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会、1979、421-433ページ。

ある基準が存在し、それがフリーターを選択する理由となっている⁽²¹⁾。すなわち、フリーターを選択する若者が、個人的に抱いている職業の評定基準と、社会に存在すると考えている職業の評定基準は異なっている。

そこで今回の調査では、まず「もし仮にあなたが生まれ変わったと想定した場合、どんな職業に就いてみたいですか？下記のすべての職業について、あてはまる数字に○をつけてください（選択肢：『ぜひ就いてみたい』『どちらかといえば就いてみたい』『どちらともいえない』『どちらかといえば就いてみたくない』『全く就いてみたくない』『分からない』）。」という質問文で、60 職業の魅力について尋ねた⁽²²⁾。ただし、この質問文で現在のロシアで人気のある職業を調査する意図は全くない。本調査では、現代のロシアの大学生が抱いている職業の魅力の評定基準がどのようなものであるのかを検討することが目的であって、現在の大学での専攻や短期的な社会環境によって影響を受けやすい流行の職業を調べるものではない。そのため、上記の質問は、職業の魅力における評定基準を調べるための予備的質問であり、改めて本稿の分析対象である「問 9（前の質問）であなたが就いてみたい職業を選んだときに、下記の点をどの程度重視しましたか？あてはまる数字に○をつけてください（選択肢：『かなり重視した』『やや重視した』『あまり重視しなかった』『全く重視しなかった』）。」⁽²³⁾ という質問をした。評定基準項目は、職業が含む性質⁽²⁴⁾ を検討し、表 5 の 24 項目とした。

(3)「職業威信」の評定基準

本稿における「職業威信」を簡潔に説明するとすれば、職業のprestigeもしくは社会的地位のことである。つまり、社会に存在する職業の格づけという、社会的な次元での職業の評価を捉えるものである。「職業の魅力」と区別すべき概念であることは既に述べた。社会的地位は一つの価値観によってのみ形成されるものではないのだが、社会的地位がどのような概念であるかという点は明確にされていない⁽²⁵⁾。そこで、職業威信の評定基準が「複数の地位構成要因からなる多次元的な概念」⁽²⁶⁾ であることを前提とし、下記の質問により、職業威信の評定基準すなわち社会的地位の構成要因を捉えることを試みた。

まず「下記のすべての職業について、一般的な社会的評価（prestige）の高さを 5 段階で評価し、あてはまる数字に○をつけてください（選択肢：『最も高い』『やや高い』『ふつう』『やや低い』『最も低い』『わからない』）。」という質問文によって 60 職業の職業威信スコアを調査した。さらに本稿の分析対象である職業威信の評定基準について、「問 11（前の質問）で

(21) 下村英雄「フリーターの職業意識とその形成過程——『やりたいこと』志向の虚実」小杉礼子編『自由の代償／フリーター——現代若者の就業意識と行動』日本労働研究機構、2002、75-99 ページ。

(22) 調査職業について詳しくは、松本かおり「体制移行期ロシア社会と職業威信——ロシアと日本の学生の比較調査をもとに」『比較経済体制研究』第 10 号、2003、104-121 ページを参照されたい。

(23) ロシア語質問文は、В какой степени Вы учитывали следующие факторы, когда отвечали на вопрос № 9? (варианты: «принимали во внимание», «скорее принимали во внимание», «скорее не принимали во внимание», «не принимали во внимание») である。

(24) 尾高邦雄『尾高邦雄選集第一巻 職業社会学』夢窓庵、1995、岡本英雄「職業と階層」山根常夫、森岡清美、本間康平、竹内郁郎、高橋勇悦、天野郁夫編『テキストブック社会学（4）職業』有斐閣、1977、32-43 ページなどで検討されている。

(25) 太郎丸博「職業評定の一致性と問主観的階層構造」都築一治編『職業評価の構造と職業威信スコア』1995 年 SSM 調査研究会、1998、15-29 ページ。

(26) 今田高俊、原純輔「社会的地位の一貫性と非一貫性」富永健一編『日本の階層構造』東京大学出版会、1979、161-197 ページ。

職業の一般的な社会的評価（prestige）の高さを評価したときに、下記の点をどの程度重視しましたか？あてはまる数字に○をつけてください（選択肢：『かなり重視した』『やや重視した』『あまり重視しなかった』『全く重視しなかった』）。⁽²⁷⁾と尋ねた。評定基準項目は、表5の24項目である。

3 職業の魅力と職業威信の調査——ウラジオストク・モスクワ

(1) 分析の枠組みと目的

表1のとおり、4つの比較分析を行う。まず、ウラジオストクとモスクワの地域間の相違について、職業の魅力と職業威信のそれぞれを比較する（比較①、比較②）。次に、職業の魅力と職業威信の相違について検討するため、ウラジオストクの学生による職業の魅力と職業威信の比較（比較③）、モスクワの学生による職業の魅力と職業威信の比較（比較④）を行う。以上の比較は、t検定（平均値の差の検定）を用い、ウラジオストクとモスクワのそれぞれの学生の職業の魅力と職業威信に関する意識構造の一端を導き出す。

地域間比較は、「一都資本主義」と言われるモスクワと、ロシアの「辺境部」と言われる極東のウラジオストク⁽²⁸⁾の学生の職業に対する意識構造の差異を明らかにするために行う。なりたい職業を選択する基準である「職業の魅力」と、社会的地位を示す基準である「職業威信」の比較では、学生自身による職業選択基準と社会的地位の評定基準とのズレ（ミスマッチ）を明らかにすることができる。

(2) 調査概要

2000年9月に、ウラジオストクの極東国立総合大学、2002年4月に、モスクワのモスクワ国立大学、国立人文科学大学、ロシア国立人文大学で調査を行った。調査人数、学年、所属学部については、表2、3、4のとおりである⁽²⁹⁾。

表1 分析対照表

	ウラジオストク	モスクワ
職業の魅力	比較③	比較①
職業威信	比較②	比較④

表2 調査人数

	男	女	計
ウラジオストク	36	79	115
モスクワ	33	101	134

⁽²⁷⁾ ロシア語質問文は、В какой степени Вы учитывали следующие факторы, когда оценивали престижность профессий? (варианты: «принимали во внимание», «скорее принимали во внимание», «скорее не принимали во внимание», «не принимали во внимание»)である。

⁽²⁸⁾ 大津定美「ロシア極東の市場移行と就業構造・失業問題」『ロシア研究』No. 24, 1997, 23-41 ページ。

⁽²⁹⁾ 調査サンプルの同一性については調査環境による限界があったことは否めない。ただし、男女間と学年間のデータについては、いずれもそれぞれ0.9程度の高い相関を得ており、これらの偏りがデータ全体に大きな効果を与えているとは言えない。

表3 学年

学 年	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生	無回答	計
ウラジオストク	44	29	22	19	1	115
モスクワ	21	22	28	62	1	134

表4 所属学部

	東洋学部	経済学部	文学部	外国語学部	社会学部	ジャーナリスト学部	その他	計
ウラジオストク	101	14						115
モスクワ			6	1	77	41	9	134

(3) 調査結果

「職業の魅力」の評定基準を尋ねる質問文は、「問9（前の質問）であなたが就いてみたい職業を選んだときに、下記の点をどの程度重視しましたか？あてはまる数字に○をつけてください」である。「職業威信」の評定基準を尋ねる質問文は、「問11（前の質問）で職業の一般的な社会的評価（prestige）の高さを評価したときに、下記の点をどの程度重視しましたか？あてはまる数字に○をつけてください」である⁽³⁰⁾。評定対象となった項目は、表5の24項目である。

a ウラジオストクとモスクワの職業の魅力（比較①）

表1の分析対照表で示した比較①の結果について考察を行う。

両地域の学生が何よりも重要視したのが、「仕事の面白さ」であった。ロシアの学生たちは、経済状況が芳しくないとはいえ、生きるために最低限必要な収入よりも、面白いと思える仕事を探したいと考えている。図1で示した若年層の失業率の高さからは、彼らにとって面白いと感じられる仕事が、労働市場に多くないことも想起できる。

しかし、ウラジオストクの学生は、2番目に「収入の多さ」を重視しており、さらに「社会における安定性」についてもモスクワの学生より重視している点は、経済状況がモスクワに比べて悪化していることを反映しているのだろう。「有利な人的つながりの多さ」や「外国へ行くことができる可能性」は、ウラジオストクの労働市場において特に人的ネットワークが重視されていること、また彼らにとってウラジオストクが労働の場としては狭くて魅力が少ないことを示していると考えられる。実際、移動の自由が広がったソ連崩壊以後、極東の人口流出は甚だしく、それを補う労働力としての中国人労働者が多数流入したことは周知のとおりである。

学歴、知識、技能の重視もウラジオストクで強く見られた。ロシアの例ではないが、学歴意識に関して注目すべき研究がある。それは、欧米が階級の違いに敏感な「階級意識社会」であるのに対し、日本は階級意識が明確ではない代わりに「学歴意識社会」であることである⁽³¹⁾。ロシアに話を戻すと、ウラジオストクはモスクワに比べて新しい都市であり、さまざまな地方

⁽³⁰⁾ 詳しくは、本稿2を参照されたい。

⁽³¹⁾ 竹内洋『日本のメリトクラシー——構造と心性』東京大学出版会、1995。

表 5 評定基準項目と調査結果

	ロシア語版項目	日本語版項目	職業の魅力		職業威信	
			ウラジオ ストク	モスクワ	ウラジオ ストク	モスクワ
1)	хороший заработок	収入の多さ	1.41	1.69	1.18	1.43
2)	возможность хвастаться своей работой	他人に自慢できる	3.00	1.48	2.57	1.68
3)	влияние на общество, власть	社会への影響力, 権力	2.44	2.44	1.80	1.67
4)	уважение окружающих	社会における尊敬の大きさ	1.87	1.98	1.65	1.56
5)	возможность повышения профессионального мастерства	技能向上の可能性	1.45	1.77	1.71	2.13
6)	возможность творчества	創造性の高さ	1.72	1.41	1.86	1.92
7)	полезность для общества	社会貢献の大きさ	1.97	2.01	2.04	2.28
8)	возможность стать известным	有名になれる	2.35	2.33	1.97	1.86
9)	наличие льгот, возможность получения жилья, и. т. д.	給料以外の特典の多さ	3.10	3.23	2.73	2.93
10)	легкость труда	仕事の楽さ	3.45	3.26	3.34	3.17
11)	увлекательность работы	仕事の面白さ	1.20	1.20	1.58	1.89
12)	возможность налаживания связей	有利な人的つながりの多さ	1.70	2.25	1.60	1.93
13)	большой спрос на данную профессию	需要（社会での必要性）の高さ	2.44	2.86	1.90	2.12
14)	нравственность	道徳性の高さ	2.30	2.35	2.47	2.73
15)	самостоятельность	独立性の高さ	1.55	1.64	1.70	2.14
16)	связь с традиционной культурой	伝統のある職業であるかどうか	2.88	3.11	3.02	3.14
17)	возможность выезда за границу	外国へ行くことができる可能性	1.89	2.48	1.84	2.47
18)	большой отпуск	余暇の多さ	3.38	3.23	3.11	3.29
19)	возможность получить новые знания	新しい知識を学ぶことができる可能性	1.51	1.92	1.79	2.38
20)	возможность проявления инициативы	イニシアチブ（先導性）をとって行動できる可能性	1.61	1.60	1.67	1.94
21)	необходимость высшего образования	高学歴の必要性	1.45	1.97	1.40	1.98
22)	стабильность положения в обществе	社会における安定性	1.68	2.08	1.52	1.82
23)	сложность трудоустройства	獲得の困難さ（就くことが難しい職業であること）	2.67	3.10	2.64	2.89
24)	ответственность перед обществом	社会に対する責任の重さ	2.39	2.72	2.30	2.62

表中の数字は、重視された項目ほど小さい。すなわち、1に近いほど重視されており、4に近いほど重視されていないことを示している。

から人々が集まってきた。つまり、古くからの階級ないし階層意識が強固であったとは考えにくく、日本の場合と同様の学歴意識社会である可能性が高い。学歴を活かした仕事をしてみたいという気持ちの表れでもあるだろう。また、ウラジオストクでは、運に頼ることができるほどチャンスがあるわけではなく、学歴に頼る傾向があると言えよう。

つまり、ウラジオストクの学生の間では現実的生活に具体的な価値のある、収入、技能、学歴が高い評価を受けており、モスクワの学生は、創造性の高さや自慢できるといった脱物質主義的な価値を重視している。その一方で、社会での影響力や尊敬といった他人からの評価については、どちらの学生もあまり高い価値を見出してない。

楽してもらうける、あまり働きたくないといった、労働を避ける考えが普及しているわけではなく、面白い仕事であればきつい仕事であってもよいという考えを持っていることも分かった。このように、過去の社会的遺産とみなされる社会主義の悪平等が肯定されていない点は注目すべきであろう。この点から、仕事の面白さをどのように若年層に伝えられるか、社会で必要とされる専門知識をどれだけ大学で身につけさせられるかといったことが、今後のロシア若

年層の労働市場の重要課題であることがわかる。

b ウラジオストクとモスクワの職業威信（比較②）

次に、比較②について検討してみよう。

職業威信の場合、どちらの地域でも、 presteegeの高い職業は収入が高いと考えられている。さらにウラジオストクとモスクワのt検定の結果を比較すると、有意水準1%で有意差が認められており、ウラジオストクで収入の多さが強く重視されている。ウラジオストクの経済状況の悪さが反映されていると考えられる。

一般にpresteegeと関連が深いと思われる項目の「社会における尊敬の大きさ」「社会への影響力、権力」「他人に自慢できる」などがモスクワで全体的に重視される一方で、ウラジオストクでは「高学歴の必要性」「技能向上の可能性」「新しい知識を学ぶことができる可能性」などが重視され、職業威信の中身である評定基準が大きく異なっていることが判明した。ここでも、比較①で述べたウラジオストクの「学歴意識社会」の傾向が見られ、ウラジオストクでは学歴が社会的地位の上昇に強く影響し、モスクワでは学歴に関係なく社会的地位上昇の機会が与えられているように学生には感じられている。いずれにしても、多くの外国企業やロシアの中心的企业が集まるモスクワには、多くのチャンスがあると考えられているのだろう。しかし、ウラジオストクでは、社会的地位の高さに学歴や技能といった能力や努力の結果が反映されていると考えられているとすれば、ウラジオストクは、努力すれば社会的地位の上昇が望める、希望をもてる社会とすることができるかもしれない。

ウラジオストクにおいて、仕事の面白さ、イニシアチブ、独立性といった項目が重視されている点からは、社会的地位の高さに関して、組織内での成功よりも個人的な成功がイメージされている可能性がある。一方で人的つながりが否定されているわけではなく、個人ネットワークが社会的地位の上昇に必要なものであると認識されている。ここでは、個人企業家が人間関係を利用して社会的地位を上昇させるという像を描くことができる。

以上の結果から、ウラジオストクでは、高収入や安定性、高学歴、個人ネットワークによって社会的地位の高さが象徴されるのに対して、モスクワでは、高収入や安定性に加え、社会における権力の大きさが社会的地位の高さを示していると言えるだろう。

c ウラジオストク（比較③）とモスクワ（比較④）における職業の魅力と職業威信

比較③と比較④の結果について、共通する意識を挙げてみよう。職業の魅力と職業威信との間で有意差があるとみなされた項目のうち、職業の魅力で重視された項目の特徴は、①仕事の面白さ、技能向上、新しい知識を学ぶことができるといった仕事の内容、②独立性という仕事上の立場、そして③内面を表す道徳性と大まかには3つに分類することができる。一方、職業威信で重視された項目は、大まかには①収入、安定性、特典といった経済資本、そして②尊敬、社会への影響力、他人に自慢できることなどの社会関係資本（何らかの利益を得ることができる人間関係）の2つに分けることができる。つまり、社会的地位の高さは、知識や技能といった文化資本（家庭環境や学校教育を通して得られた知識、教養、技能）や道徳的な行動ではなく、報酬や特典といった経済資本（財産や収入）によって決定されると感じられている。自らの職業選択において安定性を重視しないことは、彼らが体制移行にともなう改革の中でリスクを恐れず行動できることを示している反面、リスクの高い違法なビジネスに抵抗なく関わ

る可能性を指摘できる。また、現在のロシア社会における社会的地位が、知識、技能、道徳的な行動などによって得られないと感じられているとすれば、社会への不信感、不平等感が現れている可能性もある。

次に両都市で異なる点を指摘してみよう。「他人に自慢できる」という項目は、ウラジオストクでは職業威信で重視されたのに比べ、モスクワでは職業の魅力で重視されている。つまり、モスクワの学生は自慢できる職業を選択したいと考えており、ウラジオストクの学生は自慢できる職業を社会的地位が高いと考えていることが推察できる。24項目すべての検定結果を概観してみると、モスクワの学生は、ウラジオストクの学生に比べて、職業の魅力の評定基準と職業威信の評定基準との比較で有意差のある項目が多い。すなわち、経済発展が著しいモスクワで、学生たちの個人的な次元での価値観と社会一般に認められている価値観（社会的評価）のずれが大きいと言えよう。以上の点は、モスクワの学生の方が、社会的地位の上昇を目指して職業を選ぶというよりも、自己実現を求めて職業を選択したいと考えていることや、経済的に立ち遅れているウラジオストクの学生よりも、職業選択基準と社会的評価基準の乖離があり、自らの価値観と社会における価値観との相違が大きいことを示している。

d 分析結果のまとめ

以上の結果から、ロシアの大学生が、職業の魅力と職業威信をどのように捉えているのか、本調査によって得られた知見をまとめてみよう（表6参照）。

職業の魅力の評定基準の特徴は、ウラジオストクで「努力重視」であった。このことは、学歴や知識の習得を特に重視していた点からうかがえる。他方、モスクワでは、脱物質主義的価値観が強く、「希望重視」と捉えられよう。さらに、結果を総合すれば、ロシアの学生における職業の魅力とは「理想的」な意識であると言えよう（比較①）。

職業威信の評定基準の特徴は、ウラジオストクでは収入の多さや学歴が特に重視されていたことから「実利重視」と呼べるだろう。モスクワでは社会への影響力や他人への自慢などが重視されていた点から、「権威重視」と言い換えることができるだろう。このような特徴から、ロシアにおける社会的地位とは全般的に「手段的」な性質を持っていると捉えられよう（比較②）。

一方、地域別に比較すると、ウラジオストクの大学生の職業に対する意識の特徴は、上記で述べたような「努力重視」と「実利重視」の性質から、「勤勉志向」と呼ぶことができ（比較③）、

表6 ロシアにおける職業評定基準の特徴

		<比較③>		<比較④>	
		ウラジオストク		モスクワ	
<比較①>	職業の魅力	努力重視	+	希望重視	= 理想的
		+		+	
<比較②>	職業威信	実利重視	+	権威重視	= 手段的
		勤勉志向		才覚志向	

モスクワの大学生の意識の場合は、「希望重視」と「権威重視」という性質から、「才覚志向」と名づけることができるだろう。

お わ り に

本稿では、ロシアの大学生にとっての職業選択の基準である職業の魅力の評定基準、また社会的地位を示す職業威信の評定基準について分析し、彼らの職業に対する意識の特徴の一端を見出すことを試みた。最後にロシアの若年労働市場における問題点と知見をいくつか提起することにしたい。

第1には、若年層の職業意識を把握しなければ、失業問題をはじめとする労働市場に関わる問題が解決されないということである。現在のロシアの社会状況に適応しない若年層の職業意識の形成が、就業行動に対して影響を与え、彼らを労働市場における弱者としてとどめている可能性がある。それには、大学での教育が市場と合致していないことが原因なのか、あるいは学歴インフレが起これば従来であれば大学卒業者が就いていたような仕事に就けなくなったことが原因なのかといったことが考えられるが、今回の調査は彼らの意識の探索段階にあり、今後精査していきたい。

第2には、ロシアの社会問題を考える際に、経済状況が好転すればすべての状況が改善されると短絡的に考えることはできないことである。今回の調査によると、目覚ましい経済発展を経験しているモスクワでは、若者たちに経済的な成功の可能性が開かれているようであるが、職業の魅力を構成する価値観と職業威信を構成する価値観の差が大きく、個人の志向と社会の実態との間のギャップは大きかった。その点は、若年層の意識に対応した労働市場の提供、あるいは教育の提供が必要であり、それらが解消されなければ、たとえ求人倍率が上昇しても、必ずしも若年層の失業率が下がらないことを意味しているのではないだろうか。

経済発展と人々の意識との関係については、時系列的に考えていく必要が見出された。R. イングルハートが述べるような経済発展による文化の移行（物質主義から脱物質主義へ）⁽³²⁾を適用することができるとすれば、ウラジオストクの人々の意識構造はモスクワの人々と同じものに変化していくと考えてもよいのだろうか。それとも、ウラジオストクとモスクワの人々が短期的な経済変化の影響を受けにくいとされる「経済文化」を共有しているはずだとすれば、両者の相違は何に起因することになるのだろうか。広い国土を持つロシアでは、地域（管区）ごとに独立した労働市場が存在しており、モスクワとウラジオストクの労働市場は異なる状況にあると考えられるが、そのことが人々の意識に差異を生み出しているのだろうか。

本稿で考察した社会関係資本のあり方も、今後の研究に対する示唆を与えたと言える。社会関係資本のなかでも、ウラジオストクで重視されたいわゆる個人的な人間関係であるコネと、モスクワで重視された社会における権力のあり方との違いは興味深い。2004年3月に、国立高等経済大学では「ビジネスと行政の相互活動」を専門としたコース、すなわちロビイスト養成コースが開設され、国家と企業家の新しい関係を構築しようという動きがある⁽³³⁾。ロシアの経済活動におけるネットワークのあり方や、国家と個人の変化の行方も、人々の職業

⁽³²⁾ R. イングルハート著、村山皓、富沢克、武重雅文訳『カルチャーシフトと政治変動』東洋経済新報社、1993。（Inglehart, R., Culture shift in advanced industrial society, Princeton University Press, 1990.）

⁽³³⁾ Бизнесмены будут учить студентов работать с чиновниками // Независимая газета, 26 марта 2004.

意識に影響を与えられよう。

本稿は、ロシアの大学生の職業意識の調査から、現在のロシア社会のリアリティの一端を捉えようとする試みであった。ただし、ロシア社会は大きな社会変動期にあり、今後も社会構造の変化が生じていくであろう。今回の調査が歴史の大きなうねりを捉えることができたか否かについては、現段階で論じることができないが、意識構造の変化は今後のロシア社会研究にとって重要課題のひとつであることを最後に指摘しておきたい。

(付記) 本稿はロシア・東欧学会 2003 年度大会 (2003 年 10 月 4-5 日, 於京都産業大学) における自由論題報告を加筆・修正したものである。貴重なコメントをくださった諸先生方、匿名のレフェリーの先生方に御礼を申し上げます。

(本論文は複数レフェリーの審査を経て編集委員会が採択したものである。)